

# 図書館情報学と社会学の一接点

## ーセレンディピティをめぐる経験と調査ー

東京都立大学 学術情報基盤センター 人文科学研究科社会学教室

栗山正光

2021年3月10日（水）

最終講義@オンライン

# 自己紹介—職歴

- 1980. 4～2002. 3 大学図書館職員  
(筑波大、図書館情報大、琉球大)
- 2002. 4～2013. 9 常磐大学人間科学部  
(司書課程担当)
- 2013.10～2021.3 首都大学東京／東京都立大学  
(学術情報基盤センター・  
人間科学研究科社会学教室)
- 専門は図書館情報学

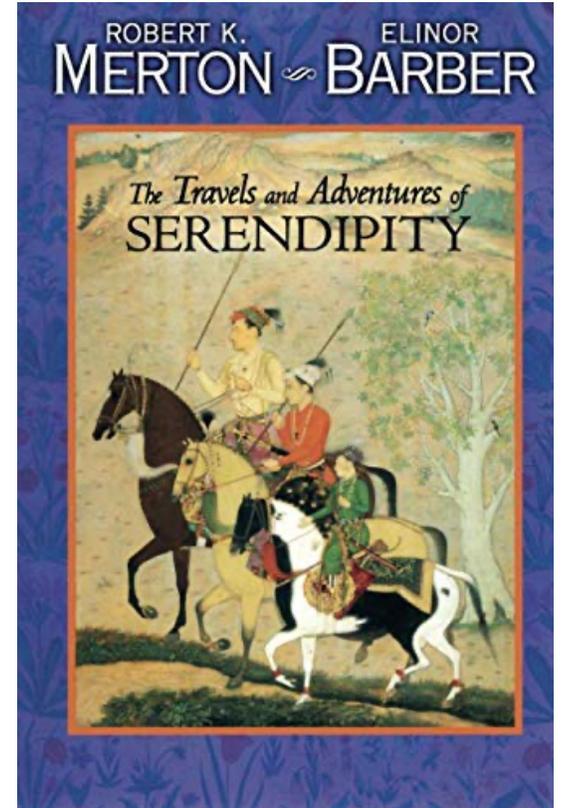
# 図書館情報学(Library and Information Science)

- 図書館学に情報学が付け加わった研究領域
- 図書館の制度、運営、資料、サービスなどに加えて、情報の生産、蓄積、検索、利用、メディアの性質なども研究対象とする
- 1960年代に米国で確立、1970年代以降さらに展開
- 背景にコンピュータや通信技術の飛躍的發展
- 図書館は知識や情報を収集、組織、保存、提供する社会的機関

cf. 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 『図書館情報学用語辞典』

# 『セレンディピティの旅と冒険』との出会い

- 個人的経験（2010年代半ば）
  - アマゾンで研究費購入図書を物色中、  
Robert K. Merton & Elinor Barber “The travels and adventures of serendipity”（ロバート・K・マートン、エリノア・バーバー『セレンディピティの旅と冒険』）に偶然出会う
  - 別の個人的経験（1990年代半ば）の記憶がよみがえる
    - 筑波大図書館で当時の江崎玲於奈学長からセレンディピティという言葉の元となった寓話を読みたいという問い合わせ
  - 改めて調べてみると、寓話の翻訳が出ていることを発見



# 江崎学長への対応（1990年代半ば）

- セレンディピティが、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole) の1754年1月28日付の手紙に出現した造語だということはすぐに判明
  - ロバーツ；安藤喬志訳 (1993) 『セレンディピティー：思いがけない発見・発明のドラマ』化学同人
  - Oxford English Dictionary (OED)
- 図書館所蔵のウォルポール書簡集から該当部分をコピーして渡す
- しかし、元の寓話“The Three Princes of Serendip”にはたどり着けなかった

# ウォルポールによるセレンディピティの説明

- 定義よりも由来による説明の方がよく理解できるでしょう
- 昔、『セレンディップの三人の王子』というバカげた童話を読みました
- 王子たちは旅の途中、偶然と賢明さによって、常に思いがけない発見をします
- たとえば、右目の見えないラバが、最近、同じ道を通ったことを発見します。というのも、右側の草の方が良いにもかかわらず、左側の草だけが食べられていたからです
- さて、セレンディピティが理解していただけましたか？

# 『セレンディップの三人の王子』 原典探索と図書館

- 利用者が示した断片的な手がかりから求める資料を探索  
←典型的な図書館のレファレンス・サービス
- 受けた質問（レファレンス事例）を記録して後から参照
  - 古くから行われている
  - 国立国会図書館の主導によるレファレンス協同データベース（レファ協）がインターネットで公開されている

# レファ協の事例

- 事例1:埼玉県立久喜図書館(1996年)
  - 「serendipity」という言葉の由来となった話を探している。
- 事例2:国立国会図書館(1998年)
  - 「The Three Princes of Serendip」という、ホレーズ・ウォルポールの造った造語セレンディピティーのもとになった寓話が載っている資料
- 事例3:埼玉県立久喜図書館(1999年)
  - 「The Three Princes of Serendip」(ホレス・ウォルポール 1717-1797 イギリスの作家)を読みたい。原書を希望する。
- いずれも該当する資料は見つからないと回答

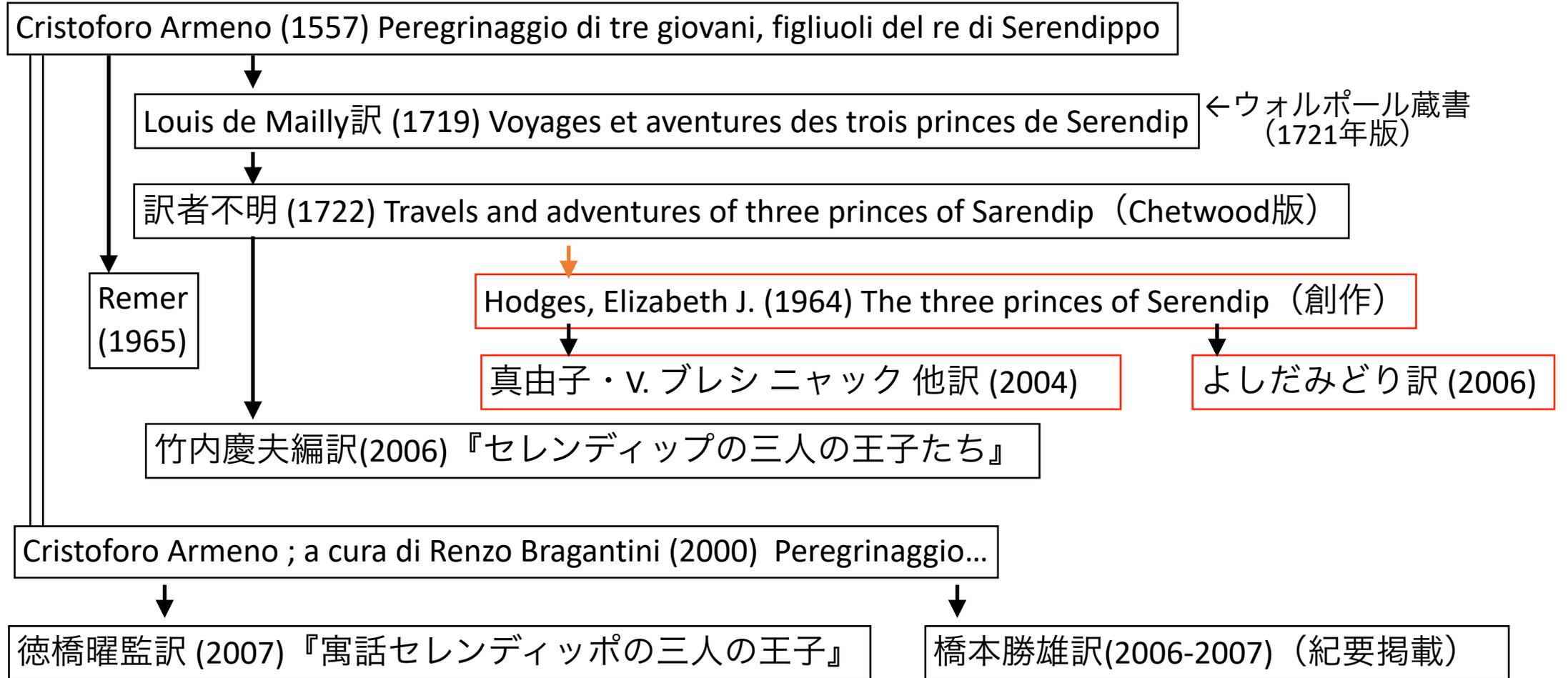
# 翻訳の出版によるレファレンス回答の陳腐化

- 2004年から2007年にかけて、寓話の日本語訳4種類出版
  - Hodges, Elizabeth J. 『セレンディップの三人の王子』 真由子・V.ブレシニャック, 中野泰子, 中野武重訳, バベル・プレス, 2004
  - Hodges, Elizabeth J. 『セレンディピティ物語: 幸せを招(よ)ぶ三人の王子』 よしだみどり訳, 藤原書店, 2006
  - 竹内慶夫編訳 『セレンディップの三人の王子たち: ペルシアのおとぎ話』 偕成社, 2006
  - Cristoforo Armeno, 16th cent. 『寓話セレンディップの三人の王子: 原典完訳』 徳橋曜監訳, 角川学芸出版, 2007
- レファ協ではフォローアップがなされている (2008年、2010年)

# 日本語訳の問題点

- Hodgesの著作はChetwood版(1722)を元にした創作
  - よしだ訳は「意訳も多く、訳者が適宜補った箇所もある」
- 竹内編訳はChetwood版(1722)の翻訳で、より原典に近い
  - 省略部分あり
  - 仏語版（ウォルポールが読んだのはこれ）からの英訳の翻訳
- 徳橋監訳は仏語版の元になったイタリア語版原典の完訳
  - 詳細な解説も掲載（ただし間違い、あるいは誤植が見られる）
- イタリア語版の翻訳には大学紀要に三つに分けて掲載された橋本訳も存在

# 原典と各種翻訳の関係



# 原典の入手に関わる追跡調査（1）

- レファ協：イタリア語版(2000年の校訂版)の日本の大学図書館の所蔵を確認
- 実は、イタリア語版原典から英語への翻訳はすでに1965年に存在
  - Remer, T.G., ed. “Serendipity and the Three Princes” University of Oklahoma Press
  - Translated by Augusto G. and Theresa L. Borselli
  - 小岩昌宏「Serendipity とは何か」『BOUNDARY』(1988)や、シャピロ；新関暢一訳『創造的発見と偶然：科学におけるセレンディピティー』(1993)の訳者あとがきで既に紹介されている
  - 日本の図書館では所蔵なし→栗山がアマゾンで購入→都立大蔵書(2020)

# 原典の入手に関わる追跡調査（2）

- 竹内訳の解説：Chetwood版は早稲田大学中央図書館にマイクロフィルム  
→早稲田では既にマイクロ資料としては所蔵しておらず、  
代替データベース「Eighteenth Century Collections Online」を利用
  - 同データベースは他大学でも導入
- インターネットでの無料公開
  - フランス国立図書館によって電子化された1557年のイタリア語版原典と1788年の仏語版
  - イェール大学によるウォルポールの書簡集

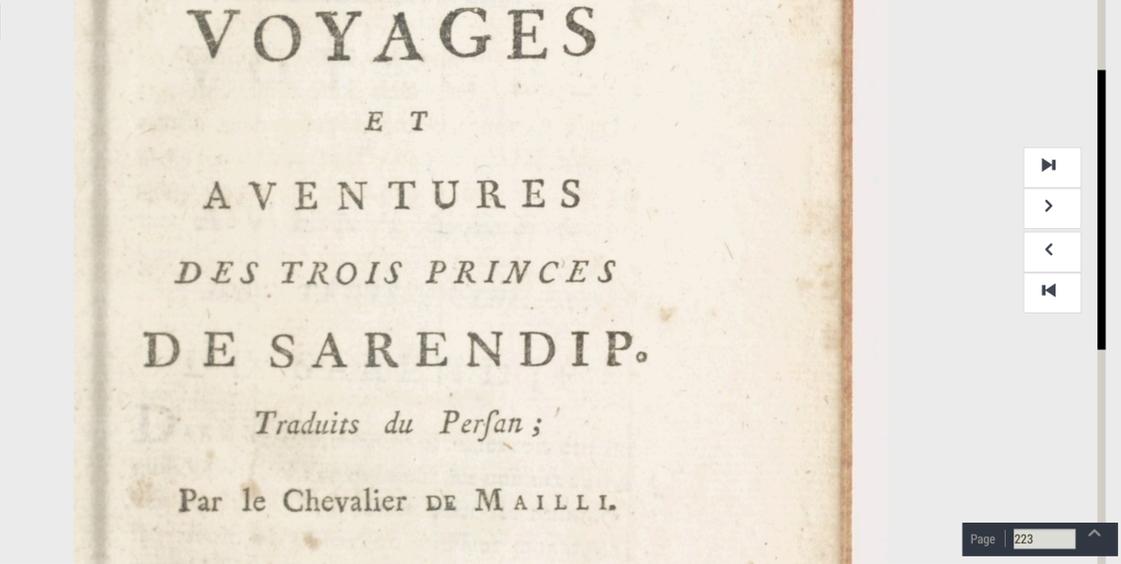
Accueil > Consultation  
Peregrinaggio di tre Giovanni, figliuola del Re di Serendippo per opra di Chr...



↑ 1557年発行イタリア語版 (Gallicaより)

↓ 1788年発行フランス語版 (Gallicaより)

... surnommé Prénaty, & de la princesse félée. Tome ...



[Previous Page](#) [Next Page](#)Go to Volume  Page  If you are having a problem viewing the page below, [click here](#).

university by the graces of her person and comeliness of her deportment'— My dear child, this is the least that the newspapers would say of the charming Bianca: I who feel all the agreeableness of your manner, must say a great deal more, or should say a great deal more, but I can only commend the picture enough, not you. The head is painted equal to Titian, and though done, I suppose, after the clock had struck five and thirty, yet she retains a great share of beauty. I have bespoken a frame for her, with the grand ducal coronet at top, her story on a label at bottom, which Gray is to compose<sup>1</sup> in Latin as short and expressive as Tacitus (one is lucky when one can bespeak and have executed such an inscription!) the Medici arms on one side, and the Capello's on the other. I must tell you a critical discovery of mine *à propos*: in an old book of Venetian arms,<sup>2</sup> there are two coats of Capello, who from their *name* bear a *hat*, on one of them is added a flower-de-luce on a blue ball, which I am persuaded was given to the family by the Great Duke, in consideration of this alliance; the Medicis you know bore such a badge at the top of their own arms; this discovery I made by a talisman, which Mr Chute calls the *sortes Walpolianæ*, by which I find everything I want *à point nommé* wherever I dip for it. This discovery indeed is almost of that kind which I call *serendipity*, a very expressive word, which as I have nothing better to tell you, I shall endeavour to explain to you: you will understand it better by the derivation than by the definition. I once read a silly fairy tale, called *The Three Princes of Serendip*:<sup>3</sup> as their highnesses travelled, they

1. Gray sent it to HW, 15 Feb. 1754 (GRAY ii. 67–8). An English translation is given in the 'Des. of SH,' *Works* ii. 469, and in the SH sale catalogue xx. 92. Both say that the translation and not Gray's Latin was on the cartouche.

2. *Le arme overo isegne di tutti li nobili . . . di Venetia*, Venice, 1578. HW's copy, sold SH iii. 204, is now wst. The

arms have been crudely coloured by hand. On the 12th page are two coats-of-arms for the Cappello family; in the one mis-spelled 'Caepello' there is a small gold fleur-de-lis on the blue bell of the crest, opposite which HW has pencilled a cross. The book is Hazen, *Cat. of HW'S Lib.*, No. 2051.

3. Ceylon. HW read the fairy tale in

Search Page

[Browse by volumes](#)[Browse by correspondents](#)[Browse letters by date](#)[Browse illustrations](#)[Browse appendices](#)[Volume 20 Table of Contents](#)[List of Illustrations](#)[Preface](#)[Letters, 15 November 1748 NS - 18 September 1756](#)[Previous Page](#) [Next Page](#)Go to Volume  Page  If you are having a problem viewing the page below, [click here](#).

408 TO MANN 28 JANUARY 1754

were always making discoveries, by accidents and sagacity, of things which they were not in quest of: for instance, one of them discovered that a mule<sup>4</sup> blind of the right eye had travelled the same road lately, because the grass was eaten only on the left side, where it was worse than on the right—now do you understand *serendipity*? One of the most remarkable instances of this *accidental sagacity* (for you must observe that *no* discovery of a thing you *are* looking for, comes under this description) was of my Lord Shaftsbury,<sup>5</sup> who happening to dine at Lord Chancellor Clarendon's,<sup>6</sup> found out the marriage of the Duke of York and Mrs Hyde,<sup>7</sup> by the respect with which her mother<sup>8</sup> treated her at table. I will send you the inscription in my next letter;<sup>9</sup> you see I endeavour to grace your present as it deserves.

Your brother would have me say something of my opinion about your idea of taking the name of *Guise*;<sup>10</sup> but he has written so fully, that I can only assure you in addition, that I am stronger even than he is against it, and cannot allow of your reasoning on families, because however families may be prejudiced about them, and however foreigners (I mean *great foreigners*) here may have those prejudices too, yet they never operate here, where there is any one reason to counterbalance them. A minister who has the least disposition to promote a creature of his, and to set aside a Talbot or a Nevil, will at one breath puff away a genealogy that would reach from hence to Herenhausen. I know a *great foreigner* who always says that my Lord Denbigh is the best gentleman in England because he is

Walpoleが引用した  
「逃げたらくだ」の  
話は、昔の小学校の  
国語教科書にも掲載  
小岩昌宏(1988)

「続Serendipityとは  
何かー日本に来ていた  
「逃げたらくだ」ー  
『BOUNDARY』 4(10)

2019年から  
国立教育政策研究所  
教育図書館  
近代教科書デジタル  
アーカイブ  
で閲覧可能

nieropac.nier.go.jp

Active! mail Google Calendar Dozens of scientific jour... 近代教科書デジタルアーカイブ

分類検索

K130:国定 尋常小学 > K130.8:国語読本

← 前のレコード 次のレコード →

このアイテムのアクセス数: 36件 (2020-09-17 10:55 集計)

閲覧可能ファイル

ファイル	フォーマット	サイズ	閲覧回数	説明
900192161	pdf	5.67 MB	52	

基本情報

データベース: 近代教科書デジタルアーカイブ

メタデータID

EG00017021

書名

小學國語讀本: 尋常科用

巻

巻5

編著者

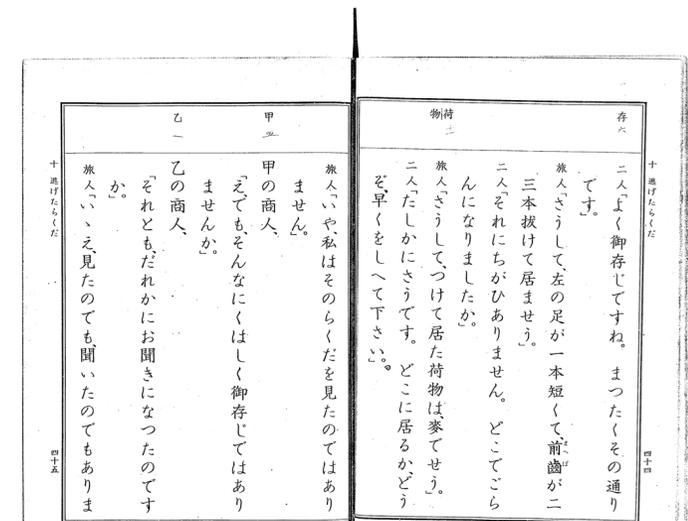
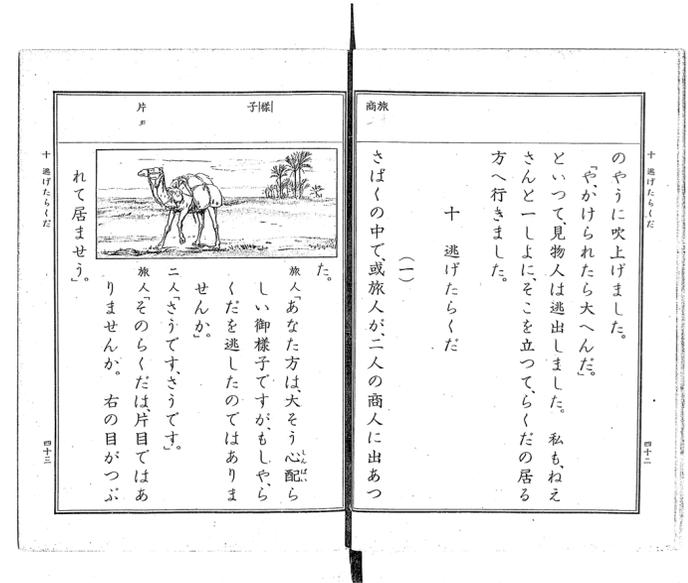
文部省編

発行地

東京

発行者

日本文館



# これまでの探索の集大成的論文

• 小岩昌宏 「セレンディピティの誕生と拡散そして迷走」 『水曜  
会誌』 24(4), 2011

掲載誌は丸ごとPDFでインター  
ネット公開  
(Googleで見つかる)

「この物語を最後まで読んでも  
セレンディピティ(の定義)の  
“より良き理解”にはつながら  
ない」

郵政省告示 第159号  
昭和42年2月28日 学術刊行物指定

ISSN 0371-408X

## 水曜會誌

第24巻 第4号

目次

大会記念講演		
非鉄合金の電気比抵抗	小松 伸也	467
クリーンコールフロンティアを目指して	櫻井 繁樹	482
談話室		
セレンディピティの誕生と拡散そして迷走	小岩 昌宏	491
ハウフの童話		
ーシュトゥットガルトとフィレンツェにゆかりの場所を訪ねるー	小岩 昌宏	504
コルポーター	熱田 善男	510
研究速報		512
会報		535
卒業者名簿		550
会則		564

第24巻 第4号 2011年12月 水曜会誌 491

談話室

セレンディピティの誕生と拡散  
そして迷走

小岩昌宏\*

Birth, Diffusion and Confusion of Serendipity

by Masahiro KOIWA

### 1. はじめに

「セレンディピティ」は、1980年代から新聞、雑誌、書籍などでよく見かけるようになった言葉である。大学の入学・学位授与式における学長訓話や研究所長の講話などで使われるケースも多い。この語に対する関心が高まったのは、ノーベル賞を受賞した白川英樹、田中耕一が自らの研究に関してセレンディピティの重要性を語ったこともあるように思われる。

“Serendipity”という語の誕生と世間に広まった過程を詳しく記した書\*\*が2004年に刊行された。本稿ではこの書、および1965年に刊行された Remer の書\*\*\*を主に参照しつつ、「セレンディピティ」の誕生とその“拡散”過程を紹介する。この語の語源は明らかであるにもかかわらず、巷間いろいろな異説が語られている。その事情についても触れてみたい。

私は「ラングミュア伝」(1978年刊行)で、初めてこの単語に出会った。この本の第9章の表題がセレンディピティ(“振り出し上手”と訳されている)であった。以来、私はこの語に興味を持ち、あれこれ調べた結果を雑誌などに寄稿した\*\*\*\*。本稿の記述は、これに記したこと一

\*京都大学 名誉教授 (昭和34年 東大工冶金 卒)

\*\*この本の原稿は1958年には完成していた。著者の一人 R. K. Merton が1965年に刊行した “On the Shoulders of Giants” でこの未刊の書に言及したところ、多くの読者から問い合わせが寄せられたという(筆者もその一人である)。結局、この書は最初にイタリア語で出版され(2002年)、その後英語で出版された。E. Barber との共著であるこの本の主要部分は、1958年に完成していた原稿そのもので、巻末には70ページ余の Afterword (R. K. Merton が加筆)が付されている。なお、Merton は2003年、Barber は1999年に亡くなっており、ともに英語版の著書を眼にすることはなかった。

部重複することをお断りしておく。  
新聞はこの言葉とその意味の歴史を見直すために、関連する人物や事件を年表にまとめ、「セレンディピティの今昔」と題する文章を発表している<sup>1)</sup>。本稿でも新聞に代わってセレンディピティに関する年表(表1)を示したので、随時参照していただきたい。

### 2. 辞書をひもとくと...

英語の接尾辞 -ty は性質・状態などを表す名詞語尾である。手元にある「英語学習進引辞典」<sup>2)</sup>には語尾が -ty で終わる単語が300余、そのうち -ity で終わる単語が246語収録されている(この辞典には serendipity は載っていない)。その大部分は形容詞に接尾辞 -ity を加えたもので、語幹から容易に意味が推測できる。二三例をあげておこう。

periodic ⇒ periodicity  
popular ⇒ popularity  
regular ⇒ regularity

これに対して “serendipity” の語幹、serendip は聞きなれない単語で、それを知らなければ意味を推測しようが

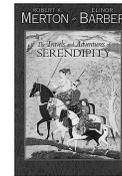


写真1 R. K. Merton and E. Barber  
“The Travel and Adventures of Serendipity”

# 社会学的意味論(sociological semantics)

- マートン&バーバー 『セレンディピティの旅と冒険』 (2004)の副題は  
”a study in sociological semantics and sociology of science”  
(社会学的意味論および科学社会学の一研究)
  - 原稿段階(1958)ではhistorical semantics (歴史的意味論)
  - ハリエット・ザッカーマンによれば、マートンの社会学的意味論に関する著作の最初と最後 (間に多くの著作)
- 小岩昌宏 「セレンディピティの誕生と拡散そして迷走」 も社会学的意味論の側面を持つ

# 社会学的意味論の研究対象

- 特定の語句の起源と創始者の社会的立場
- それらの利用の社会的様式形成
- それらに付与された意味の変化、すなわち進化
- それらの拡散の様態
- それらの利用の結果（意図されたもの、されなかったもの）
- それらの生存あるいは消滅の条件

(Zuckerman, Harriet. 2010. "On sociological semantics as an evolving research program.")

# 翻訳の問題

- マートンは各国の辞書でserendipityの訳語を調査
  - 日本語：掘り出しじょうず（研究社新和英大辞典, 1954）
  - 中国語：偶然 發現 珍寶 的 運氣  
the luck to find treasure fortuitously (via Dr. Dainian Fan, 2000)
- マートンの主著『社会理論と社会構造』（森東吾ほか訳, 1961）では「掘出し」、回想録『科学社会学の歩み』（成定薫訳, 1983）では「掘り出しじょうず」と訳してある
- さまざまな訳語の起源、普及なども社会学的意味論の対象（?）

# 社会学的意味論の応用（1）機関リポジトリ

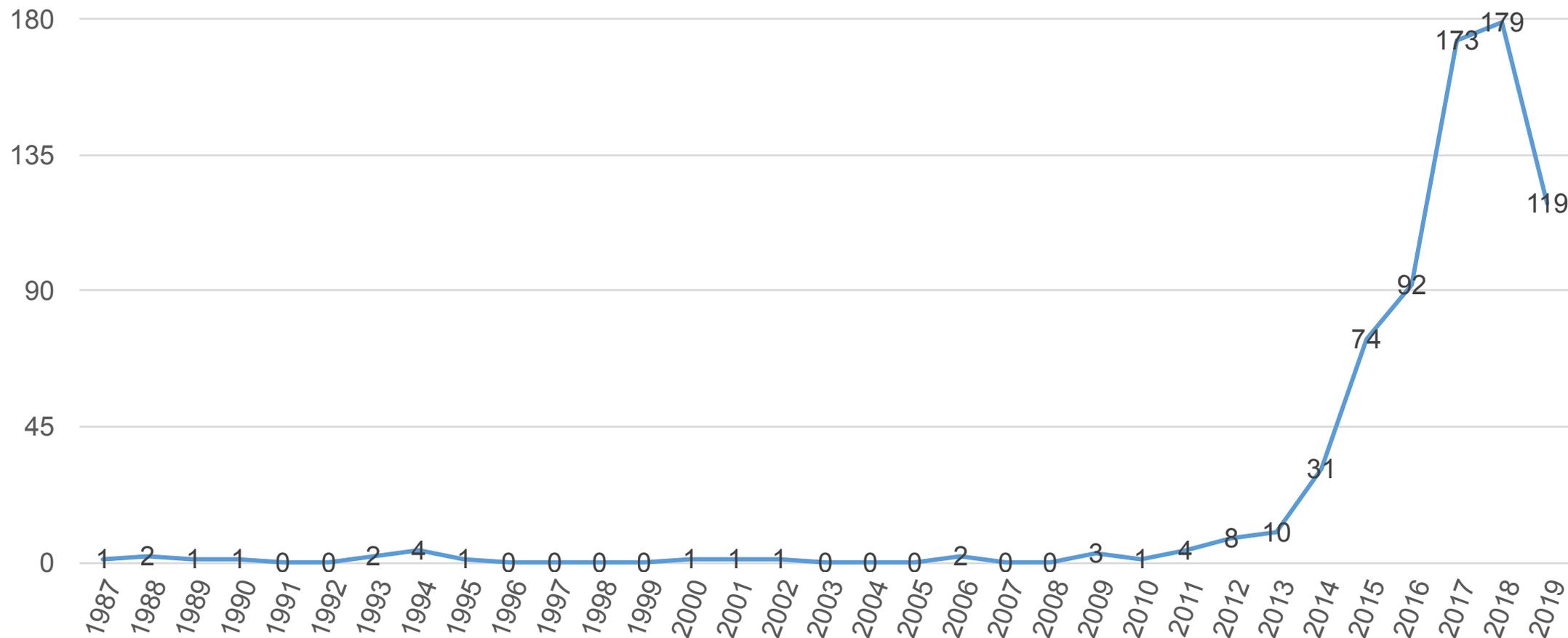
- 2002年頃から、千葉大学など国立大学の図書館関係者の中で、欧米では open access (OA) と institutional repository (IR) の動きが活発化しているとの情報が流れる
  - 学術雑誌の価格高騰と電子ジャーナル化
  - 一部の大学のみ予算がついた電子図書館事業への批判
- Crow, Raym (2002) “The case for institutional repositories”を「機関リポジトリ擁護論」と訳して勉強会に提示（2003年）
  - 常磐大学のウェブサイト（個人のホームページ）で公開

# 社会学的意味論の応用（2）ハゲタカジャーナル

- “Potential, possible, or probable predatory scholarly open- access publishers” に由来
  - 怪しいオープンアクセス出版社のブラックリスト
  - ジェフリー・ビール (Jeffrey Beall) というコロラド大学デンバー校の図書館員が2011年から作成・公開（個人のブログ）
  - 2017年、本人がインターネット上から削除
- 2012年7月の大学図書館職員長期研修で「ハゲタカ出版社」と訳して紹介
- 2015年、『情報管理』に「ハゲタカオープンアクセス出版社への警戒」を発表
- 2018年4月3日、毎日新聞がトップ記事に（「ハゲタカジャーナル」が広まる？）

# Scopus中のハゲタカ出版社／ジャーナル関連文献数（出版年別）

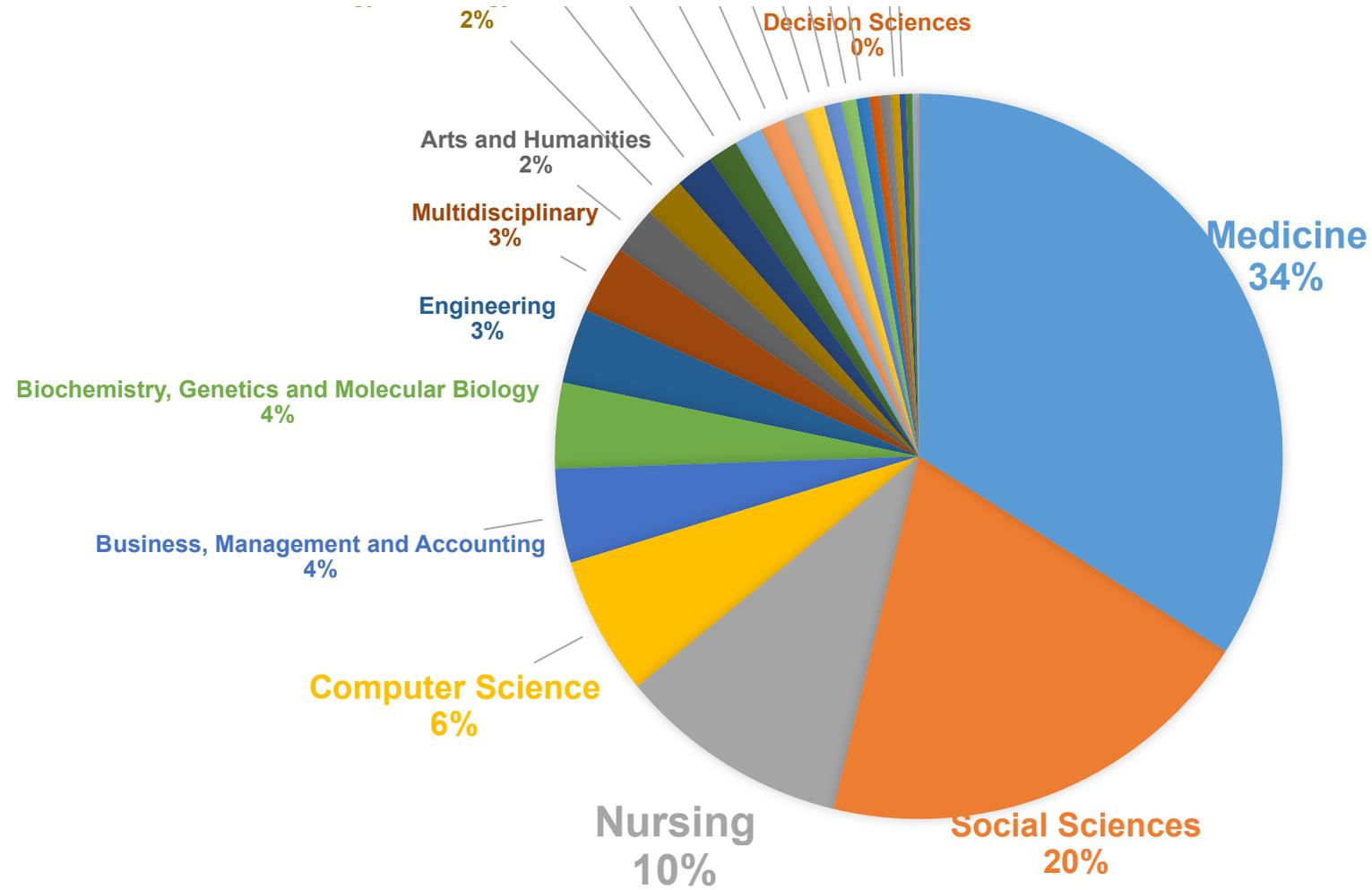
合計=711  
2019年10月調査



# Scopus中のハゲタカ出版社／ジャーナル関連文献数（分野別）

合計=711

2019年10月調査



# 科学社会学と計量書誌学

- 計量書誌学(bibliometrics) : 文献データベースを利用して「文献の集合を統計的に分析することにより、文献の生産、流通、利用等に関するさまざまな事象を計量的に扱う研究領域」 (『図書館情報学用語辞典』)
- マートンはLexis-Nexis(新聞・雑誌 18,000 以上から成る全文データベース)とJSTOR(学術雑誌 170 誌のバックナンバー)における“serendipity”という語の1960年から1999年までの出現件数を数えて比較
  - Lexis-Nexisでは爆発的に増加しているのに対し、JSTORでは増加しているもののその割合は緩やかであると指摘

# “serendipity”、「セレンディピティ」の出現件数

	Lexis-Nexis	JSTOR	Web of Science	Scopus	CiNii Artcils
1960-1969	2	135		33	0
1970-1979	60	181	57	88	0
1980-1989	1838	207	98	195	1
1990-1999 (JSTOR は-1996)	13266	236	313	378	36
2000-2009			613	797	98
2010-2019			1185	1747	139

マートン(2002)

栗山 (2020.12.27)

# セレンディピティとブラウジング

- マートンはOxford English Dictionary (OED)を拾い読み（ブラウジング）していてserendipityという語を見つけた
  - 自己例証(self-exemplification) 的、すなわちセレンディピティとの出会い自体がセレンディピティ
- OEDの入手経緯もセレンディピティ的
  - ハーバードの院生時代、銀行休業宣言で預金がおろせない中、書店でブラウジングしていてOEDを見つけ、後払いで購入
- ブラウジングによる資料との出会いは図書館が提供する機能の一つ

# まとめ

- マートン&バーバー『セレンディピティの旅と冒険』との出会いを契機として図書館員時代の未解決課題を再調査
  - 寓話原典および翻訳の探索
  - レファレンス事例の陳腐化とフォローアップの確認
- 社会学的意味論の研究対象としてのセレンディピティ
  - 応用として、機関リポジトリ、ハゲタカジャーナル
- 計量書誌学は科学社会学と図書館情報学が重なり合う研究領域
- ブラウジングによりセレンディピティを誘う場としての図書館

May the serendipity be with you!